

高梁市で活躍中の方を紹介する

高梁市人図鑑

vol.
01

高梁の魅力のひとつ、「人」

そんな高梁の魅力ある人をご紹介します



プロフィール

青山 美里

あおやま みさと



生年月日 1999年3月29日 血液型 O型

出身地 埼玉県さいたま市

座右の銘 迷ったら心躍る方へ

趣味 動画を見ること

好きなこと 食べること、友達と遊ぶこと

活動内容 高梁市地域おこし協力隊 広報担当
吉備国際大学Charme岡山高梁に所属し、
サッカー選手としても活動中

ひとこと 高梁市地域おこし協力隊として、高梁の魅力の一つである“人”を「note」で紹介しています。今回は、2025年に取材をした15名の方を紹介しています。



目次

矢動丸 祐子さん	4
矢田 里菜さん	6
難波 国夫・周子さん	8
石田 雄一さん	12
大場 正康さん	14
三宅 秀美さん	16
吉田 恵子さん	18
田淵 雄三・愛子さん	20
三浦 孝仁さん	22
木下 正伸さん	24
岡村 元美さん	26
藤井 輝彦さん	28
藤井 敬子さん	30
島 一郎さん	32
小田 幸伸さん	34

「なんとなく」の移住が繋いだご縁

矢動丸 祐子さん



「移住した理由ですか？ なんとなく…ですね。」

「そうやわらかく笑いながら話すのは、2020年の冬に高梁へ移り住んだ矢動丸さん。よくある「自然に惹かれて」や「地域おこし協力隊に憧れて」といった明確な理由ではなかったと振り返る。

当時、転職を考えていたタイミングで、吉備国際大学で教鞭をとっていた知人から「高梁に来てみない？」と声をかけられた。お盆休みに初めて訪れた高梁は、コロナ禍で人の距離感が大きく変わ

っていた頃。新しい生活の場を探す中で、流れる時間や人との距離、まちの空気が自然と馴染んだという。

見えてきた、このまちな面白さ

「何も無い」って言われてたけど、学校も病院もスーパーもある。吹屋もお城も城下町もあって、面白いところだなと思いました。」

そこから3年間、地域おこし協力隊としての活動がスタート。まちの人や団体と関わる中で少しずつ自分のやりたいことや得意なことが見えてきた。



子どもや若者の「居場所」をつくりたい

活動を通して感じた課題のひとつが、子どもや若者の居場所づくりだった。公的施設は使い勝手が難しく、学校や家庭以外で安心して過ごせる場は限られている。

「学校でもない、家でもない、もうひとつの『居場所』が必要だなんて、ずっと思っていたんです。」

その想いから生まれたのが、空き店舗を活用した拠点「ニューエスカ」。(高梁市栄町)

「どうせやるなら、

「関わった人の場所」にしたくて、中高生たちと一緒に作りました。」

商店街の活性化を話し合う中での空き店舗利活用の提案から始まり、若者たちと少しずつ形にしてきたニューエスカ。今では、子どもや若者が気軽に立ち寄れる居場所として、まちに静かに根を下ろしている。

「『地域のために』と意気込んだわけじゃないけど、やってみたら面白かった。誰かの役に立っていることが嬉しいですね。」



地域の人たちと共に作ったニューエスカの内観

任期後も続く、高梁との関わり

協力隊の任期を終えた現在も、矢動丸さんは高梁に暮らし続けている。高梁市からの委託で「大人の里山留学」

のコーディネートを担当しながら、ネット通販企業の集客支援や、市内の学校と地域をつなぐ仕事にも携わる。

自分らしく、地域と関わり続ける

大切にしているのは、「自分らしく地域と関わり続けること」。役割にとらわれず、必要とされるところに自然体で関わっていく。その姿勢が、高梁というまちに心地よく溶け込んでいる。

彼女が関わるニューエスカもまた、多くの人にとって「自分らしくいられる場所」になっ

吹屋に暮らし、地域とつながる

矢田 里菜さん



青森から西日本へ
「大人の里山留学」が
導いた高梁での新しい
暮らし

2025年4月から
高梁市・吹屋地区に暮
らす矢田さんは、現在
「地域おこし協力隊」
として活動中。SNS
発信を通じた地域の魅
力発信や、情報発信ノ
ウハウの提供などを行
っている。
「気づいたらいろんな
ことを頼まれていて、
何屋さんなんだろうっ
て思うこともあります
(笑)」
そう話す表情からは、
忙しさの中にもどこか
楽しさがにじむ。行政
や地域、個人からの相

談に応じながら、吹屋
での暮らしは少しず
つ、でも確実に地域に
溶け込んだものになっ
ている。

西日本を知りたくて

高梁に来る前は横浜
に住んでいた。西日本
を全然知らなかったこ
とから、「せっかくだ
から」と各地でお試
し移住を繰り返し、その
なかでたまたま見つけ
たのが高梁市の「大人
の里山留学」だった。
「香川にお試し移住し
ていた時に、瀬戸大橋
で岡山がすごく近いっ
て知ったんです。せっ
かくなら岡山にも行っ
てみようと思って調べ
てたら、高梁の里山留

学にヒットしたんで
す。」

最初は1カ月の予定だ
ったが、気づけば3カ
月。吹屋での暮らしの
心地よさに惹かれた。

「最初の1カ月、買い
物に行かなくても近所
の人が野菜をくれたり
して（笑）。人の優し
さが嬉しくて、『ここ
なら暮らせるかも』っ
て思えました。」

協力隊になったきっかけは「人との出会い」

里山留学中に出会っ
た協力隊のメンバーや
地域の人々との交流
が、今の活動のきっか
けに。『協力隊になり
たい！』っていう

使命感というよりは、
出会った人たちの力に
なれる仕事の一つが協
力隊だった、っていう
感じですね。」

実際に協力隊として
活動を始めてからも、
高梁では協力隊の認知
度が高く、「こっちか
ら行かなくても声をか
けてもらえる」ことが
やりがいのひとつ。地
域の困りごとに自分の
知識やスキルで応える
ことが、何より嬉しい
という。

**高梁で好きな場所、好
きなこと**

住んでいる吹屋は、
「ノスタルジックな雰
囲気が好き」と話す。

観光地として有名な備
中松山城へも登った。

また、「川ガニが美味
しい」「食文化が豊か
」と、食への愛も深い。

**これからやってみたい
こと**

今後は、地域の文化
や祭りを体験し、それ
を観光資源として活か
すようなツアーづくり
にも取り組みたいとい
う。

「備中たかはし松山踊
りとか、そういう地元
の文化をまず自分が体
験して、それを市外の
人にも体験してもらえ
る仕組みが作れたらいい
なあって思います。」



地域の方と交流する矢田さん

東北でも神楽を体験で
きるツアーがあるの
で、そういうのを参考
にして高梁にも取り入
れたいです。」
人との出会いに導か
れ、自然と文化に惹か
れて定住を決めた彼
女。今後の活躍にも注
目したい。

ここでしか、作れない酒がある

難波国夫・周子さん



「この場所、この水、

この米でなければ、作れない酒がある」

小さな酒蔵を守る、手作りの誇りと挑戦

高梁市有漢町。のどかな山あいの町に、手づくりの酒を守り続ける小さな蔵がある。

かつて杜氏とっしに任せていた酒造りを、今では自らの手で担う国夫さん。ここ、有漢の井戸水と岡山の米だけを使い、「ここでしか作れない酒」を今日も仕込んでいく。

高齢化、人手不足、酒離れといった逆風の中でも、手間を惜しまず、時代の変化に柔軟に向き合うご夫婦の姿には、地域

に根差したもののづくりの真髓を感じた。

酒蔵を継ぐことになった、偶然と決意

国夫さんは岡山市出身、周子さんは地元の有漢町で生まれ育った。元々は小学校の教員をしていたお二人。しかし、家庭の事情で「ここをどうするか」ということになって、もうしょうがないかな」と迷った末に、夫婦で蔵を継ぐことを決意。昭和63年（1988年）Uターンしてこの土地に戻り、家業である酒造業を一から学ぶ日々が始まった。



杜氏の時代から、自分の手で作る時代へ

当時は、冬の間だけ蔵に来る「杜氏」が酒造りを担うのが一般的だった。しかし、時代とともにそうした人材も高齢化や人手不足で少なくなってきた。

今から10年前、酒造りを担っていた杜氏が倒れたことをきっかけに、「仕方なく自分がやるしかない」と思ったという。

杜氏に2年ほど付きつきりで、色々教えてもらった。ただ、「普通の人が10年かかってもできないような仕事を1年か2年で教えるんだから」と、とても

厳しくされた。「夜逃げしようかと思った」と笑いながら国夫さんはいう。

一試行錯誤の中で、自分の手で酒を仕込むやりがいや自由度に気付いた国夫さん。機械化や作業工程の見直しで少しずつ効率を上げながら、小規模だからこそできる手作りの醍醐味にのめり込んでいく。



実際に使っている井戸

井戸の水が命。すべてのお酒はここから始まる

ここの酒蔵最大の財産は、地下から湧き出る井戸水。杜氏で「現代の名工」になった方から、

「この水は財産」と言われるほど。

「ここの水が美味しいからこそ、美味しいお酒がつかれる、水の神様に感謝です」と国夫さんは微笑む。

人手不足と機械トラブル。厳しい現実と向き合う日々

後継者不足や機械の老朽化といった現実も突きつけられている。

「絞り機が壊れたとき

は、食事なんかも喉を通らないし、ずっと不安ですわ」と国夫さん。「冬は籠りつきり。逆に出費も少ないからある意味お小遣いが貯まるんです(笑)」



蔵に並ぶ仕込みタンク

「美味しい」の一言が、何よりの喜び

イベントや試飲会で、「このお酒がー

「一番美味しい」といつてくれるお客様も。

「握手を求められたこともありますよ」と嬉しそうに語る国夫さん。

「美味しいと言ってくれるものを作って、みんなに喜んでもらうことが、存在価値であり、それが喜びです。そのためには水と米、それから一つ一つの工程をちゃんと手抜きをしないでやる。」

未来。1人でも多くのファンを

日本酒の消費量が減少し続ける中、「量ではなく質」で勝負したいと語る国夫さん。

「うちの酒を好きだと言ってくれる人を、1人でも増やしたい。それが私たちの目標です。」

輸出も考えたが、まずは国内で1人でも多くの人に喜んでもらうお酒づくりを心がけている。スパークリング酒や桃の酵母を使ったお酒、赤米、低アルコール酒など様々な商品開発も考えている。

「積極的にイベントに参加したり、酒蔵見学も受け入れ、リピーターも増えてきて、東京や倉敷から訪れるファンもいる。そういったお客さんとの絆を深め

ていきたいですね。」

高梁のこの地

「高梁の好きなのところは、ループ橋から見える高梁の市街地の風景はいいと思う、あとは神原からの雲海も抜群」と話すご夫婦。そんな自然と静かな時間が流れるこの場所こそが、酒の味を育てている。



おうほうれつ

櫻芳烈『生原酒 有漢』

「この水と岡山の米。ここでしか作れないお酒を。」

酒造りはまさに人生そのもの。

「美味しい」と言ってくれる誰かの笑顔のために。

今日も高梁の小さな酒蔵では、夫婦二人のこだわりと想いが詰まった一杯が、丁寧に仕込まれている。



店内の様子

特集!

ほうれっしゅぞう シャルおこ隊×芳烈酒造



関わりの中から生まれ
た、一本の酒

芳烈酒造のお酒づくりに関わり、仕込みを手伝ったことから始まったシャルおこ隊のご縁。

ラベルデザインもシャルおこ隊が手がけ、酒は芳烈酒造が丁寧に仕込んだ。

人との関わりから生まれ、今もこの町で販売されている一本。

芳烈酒造株式会社

岡山県高梁市有漢町
有漢2535-1



高梁・成羽で支える石田商店

石田 雄一さん



生まれ育った町で家業を継ぐ

石田さんは、高梁市成羽町下原の出身。高校卒業後は県外の大学へ進学し、卒業後は岡山市内で5年間サラリーマンとして働いた。

しかし「育った成羽に戻りたい」という思いが強くなり、家業である石田商店を継ぐため地元へUターン。現在は、日用雑貨の小売りと卸業を営みながら、地域とのつながりを大切に日々の仕事に向き合っている。

商工会青年部での挑戦

家業を継いだ後、石田さんは商工会青年部に参加する。

「地元にいるなら自然な流れでした。」と語るように、迷いはなかったという。青年部で

は、成羽愛宕大花火に深く関わり、仕掛け花火の合図となる綱火に点火する「流星奉行」を復活させた。

火を走らせる瞬間は花火のクライマックス。「青年部で本気で取り組んだ、忘れられない経験です。」と振り返る。

活動を通じて、世代や業種を超えた出会いがあることも大きなやりがいだ。「自分の商売だけでは得られない刺激があります。」と笑顔を見せる。

成羽愛宕大花火と安全への配慮

成羽愛宕大花火は、江戸時代から約300年続く伝統行事。山あいに響く大音響と、動きのある仕掛け花火が特徴だ。

「長い歴史を持つ花火を、途切れさせず次へつなぐことが使命。」と石田さんは語る。近年はボランティアの協力も得ながら、市民参加型の花火大会として運営されている。

特に力を入れているのが安全対策だ。事故や怪我を防ぐため、導線やベビーカー対応など細かな点まで配慮を

重ねている。地域づくりへの思い

石田さんは、イベントの意義について「人と人が交わるきっかけを生むこと。」と話す。

花火大会は一日限りの催しだが、準備や関わりの積み重ねが地域を豊かにしている。その過程こそが、町の力になると感じている。

これからの成羽へ

伝統を守る一方で、改善も欠かさない。「少しずつでも良くなっていくことで、新しい価値が生まれる。」と前を向く。

また、空き家や空き

店舗が増える現状にも触れ、「誰でも集える場所ができたら。」と町の未来を思い描く。

最後に、「商工会や地域活動に参加して、人とのつながりを楽しんでほしい。」と若い世代や移住者へメッセージを送ってくれた。

生まれ育った成羽を支え続ける石田さん。その歩みは、地域と共に生きる商人の姿そのものだ。



地域の方と一緒に準備している様子

偶然の出会いから広がった“ええ加減”な暮らし

大場 正康さん



吹屋との偶然の出会い

「最初は遊び半分だったんですよ。」

そう笑いながら話すのは、吹屋でカフェ「紅ベニや」(成羽町吹屋)を営む大場さん。

現在は古民家カフェの運営に加え、古道具の取り扱いや陶芸、イベントプロデュースなど幅広く活動している。その原点は、市役所退職後に何気なく訪れた吹屋で出会った一軒の空き家だった。町並みと空気感に惹かれ、「ちょっと借りてみようか」という軽い気持ちで始めたことが、今の暮らしにつながっていく。

義理と人情が支えた古

民家改修

改修を始めると、床や壁の傷みなど想像以上の問題が次々と見つかった。「もう、引くに引けんようになってね。」

それでも地元職人や仲間助けられながら、少しずつ手を入れていくうちに人との縁が広がり、やがて「紅や」が生まれた。

ベンガラの町並みに溶け込むその店は、コーヒーや軽食を楽しめるだけでなく、古道具や作品が並ぶ小さなギャラリーでもある。「店をやるうと思っ始めたわけじゃないけ

ど、気づいたら人が集まる場所になつてた。」と振り返る。



古道具がたくさんある「紅や」の内観

「ええ加減」という生き方

大場さんが大切にしているのは「義理と人情」、そして「ええ加減」という考え方だ。

投げやりではなく、

「ちようどいい塩^{あん}梅^{ばい}」。完璧を求めすぎ

ず、自分も相手も無理をしない。「ええ加減

でやるから、長く続くんよ。」その姿勢は、

店の雰囲気や人との関係性にも自然と表れて

いる。

放てば手に満てり

座右の銘は「放てば

手に満てり」。手放す

ことで思いがけない豊

かさが巡ってくるとい

う意味だ。

「全部抱え込まんほう

が、人が関わってくれ

て、面白いことが起き

る。」紅やの什器や古

道具の多くも、人との

縁から集まったもの

だ。物語のある道具

が、訪れる人との会話

を生み出している。

紅やという「人生の交

差点

紅やは、大場さんに

とって「人生の交差

点」観光客と地元の

人、若者と年配者、作

り手と受け手が、ここ

で自然に交わる。

「たまたま立ち寄った

人同士がつながる瞬間

が、一番おもしろい。」

吹屋の縁側のようなかの場所で、大場さん自身もまた、流れに身を任せながら暮らしを楽しんでいる。



「紅や」の外観

一つひとつのお菓자에、優しい時間を込めて

三宅 秀美さん



高梁市備中町出身の三宅さんは、地元で焼き菓子のお店「やさしい焼き菓子コナコナ」を営んでいる。

お店の名前のおり、やわらかく温かな雰囲気の三宅さん。お話を伺ううちに、お菓子づくりに込めた「やさしさ」の理由が見えてきた。

子どものおやつから、再びお菓子の道へ

高校卒業後、岡山市の製菓専門学校へ進学し、洋菓子店に就職。接客の楽しさに惹かれて販売の仕事に転職し、結婚・出産を経て一度お菓子の世界から離れる。

「子どもが生まれて、離乳食の延長でおやつを作り始めたのがきっかけです。もう20年くらい前ですね。」

手作りのおやつを友人のお茶会に持っていくうちに、「お店に置いてみたら？」という声がかかり、少しずつ販売がスタート。そこから現在の「コナコナ」へとつながっていく。

「コナコナ」の由来

イベント出店前夜、慌てて考えた店名が「コナコナ」。「ワンワン、ニャンニャンみたいに、粉」を2回言ってみたらどうかなっ

て。」

偶然にも同名の絵本
が出版されていたり、
ロゴを手がけた消しゴ
ムはんこの作家さん
との出会いがあったり
と、不思議なご縁も重
なった。



コナコナの看板

「いつ行っても同じ
味を大切に」

三宅さんのお菓子
は、素朴でどこか懐か

しい味わい。「特別な
こだわりというより、

いつも同じ味であるこ
とを大事にしていま
す。」素材はできるだ
けシンプルに、安心で
きるものを選ぶ。

「何が入っているか
一目でわかるお菓子」
を指している。

日常に寄り添うお菓子

「『嫌なことがあって
も、コナコナのお菓子
があると元気が出る』
って言ってもらえるの
が一番うれしいです
ね。」

車の中でこっそり食
べる自分へのご褒美。

そんな小さな幸せの
時間に寄り添えること

が、三宅さんのやりが
いだ。

一つひとつを丁寧に

「お客さんにとって
は、そのお菓子がたっ
た一つ。だから一つひ
とつ丁寧に作りたいん
です。」

「やさしい焼き菓子」
という名前には、そん
な想いが込められてい
る。

今、そしてこれから

現在は月に一度の営
業を中心に、通信販売
やイベント出店も。

「これからは営業日を
少しずつ増やしていけ
たら。」と意気込む。



高粱の好きなところ

「高粱は、暮らすのに
困らないし、綺麗な場
所も多い。」何もな
いようで、ちゃんとあ
る」ところが好きです
ね。」

静かな町で、自分の
ペースを大切にしながら
焼き菓子を焼く
日々。

そこには、三宅さん
らしい穏やかな生き方
が映し出されている。



コナコナのクッキー

えいやー！の行動力で生まれた「天籟」^{てんらい}

吉田 恵子さん



高梁で生まれ育った吉田さん。結婚後は神戸で暮らし、のちに高梁へ戻ってきた。趣味ではじめたレコード店「キヤラメルママ」を37年続け、そこから一棟貸し旅館「天籟」のオーナーへと歩みを広げてきた。

息子のひと言から

「天籟」を始めたきっかけは、アメリカに住む息子さんの何気ないひと言だった。高梁市の空き家バンクで古い商家を見つけ、「宿をやったら面白いんじゃない？」と提案されたという。

実際に建物を見て、「江戸時代の趣が残る家で、壊すのはもったいない」と感じ、購入を決意した。

「もう、えいやー！でやるしかないと思ってた。」と吉田さん。その瞬間の決断が、「天籟」の始まりだった。

コロナ禍の宿づくり

購入のタイミングは、コロナ禍直前。先の見えない状況のなかでも庭の枯山水かれさんすいや落ち着いた内装は、日本文化の奥深さを伝え、海外からの宿泊客にも好評だ。



高粱を伝える宿

吉田さんにとって「天籟」は、街の魅力を伝える場所でもある。宿泊者が飲食店や商店を訪れ、街を歩くことで、地域に小さな賑わいが生まれている。

「高粱をもっと知ってもらいたい。」その想いが、宿のあり方に表れている。

「家族だけでゆっくり過ごせる一棟貸しにしよう」と方針を定め、2023年1月に開業した。

防犯面や案内の工夫を重ね、今では国内外の家族連れに親しまれる宿となっている。

「天籟」に込めた想い

宿名の「天籟（てんらい）」は、天の声や自然の音を意味する言葉。訪れる人が心を落ち着かせ、自然や歴史を感じてほしいという想いが込められている。



「天籟の看板」

えいやー精神の源

くよくよしない性格と、思い切りの良さが吉田さんの原動力。未経験の宿運営にも迷わず挑戦した。

元気の源は「押し

活”。西城秀樹のファンで、音楽から力をもらっているという。

「諦めず、やれることをやる。」その姿勢が人を惹きつける。

高粱とともに

川と山に囲まれた高粱の風景や、穏やかな暮らしを愛する吉田さん。

一歩踏み出す勇氣と街への想いが重なり生まれた「天籟」は、高粱の文化と歴史を未来へつなぐ宿となっている。



天籟のお風呂場から見える庭の枯山水



天籟の外観

自然体で生きる、2つボタン

田淵雄三・愛子さん



瀬戸内から高梁へ

瀬戸内市から高梁市

へ移住して6年。ぶどう農家として汗を流しながら、夫婦ユニット「2つボタン」としてイラストや手製本の制作活動を続ける田淵雄三さん・愛子さん。自然体で暮らし、作る二人の歩みをたどる。

移住直後に参加した地域行事「渡り拍子」では、初参加ながら踊りを覚えて披露。「初めて来た人が覚えてくれた」と涙を流して喜ぶ地域の人の姿に、高梁の温かさを強く感じたといい。

夫婦ユニット「2つボタン」のはじまり

二人はもともと作家として出会い、県内のアートイベントを通じて活動を共にするようになった。ユニット名「2つボタン」は、信楽焼しがらきやきのボタンをきっかけに名付けたもの。「二人で一組」という意味が込められている。

雄三さんは筆ペンによる猫の絵や言葉を、愛子さんはデザインや印刷物への落とし込みを担当。自然と役割分担ができています。



猫イラスト

「ださ・かっこ悪い」
がらしさ

「シュツとしてない、ださ・かっこ悪いくらいが自分たちらしい。」

2つボタンの作品は、シンプルな線とやさしい言葉で、見る人の心にすっと入り込む。愛子さんの丸っこい人物イラストは「たかはししごと図鑑」をきっかけに生まれ、二人ならではの世界観が広がっていった。



「たかはししごと図鑑」

手仕事から広がる表現

雄三さんの実家は
代々続く製本業。

高梁に来てからは、その技術を活かした手製本や御朱印帳制作、ワークショップも行う。尾道の神社での御朱印帳制作は、技術を磨く大きな経験となった。



御朱印帳の良神社

ふたつの仕事

現在は、農業と制作を両立する日々。

ぶどうを中心に米やゆずを育てながら、展示やイベント、依頼制

作に取り組んでいる。「高梁は人がいい。移住者も自然に受け入れてくれる」と二人は話す。

好きなことを続ける力

三人の子どもを育てながら、「好きなことは続けていい」と伝えたいという二人。

「職業にならなくても、好きで続けたことが、いつか誰かの役に立つ。」

2つボタンは今日も、高梁の暮らしの中から、日々の小さな気づきを絵と言葉で表現している。



「これをやるもんだ」と思って育った

三浦 孝仁さん



高梁市落合町。三浦孝仁さんは、この町で生まれ育ち、今も高梁で暮らしている。

「大学のときだけ鹿児島に行きましたけど、それ以外はずっと高梁ですね。」

実家は金型工場。幼い頃から工場が身近にあり、金属を削る音や油の匂いの中で育ってきました。

「小さい頃から、なんとなく『これをやるもんだ』と思ってました。」

将来を強く意識したわけではないが、家業はいつも身近な存在だった。

家業から独立へ、設計一本の道

大学卒業後は約10年間、家業の金型づくりに携わった。しかし不況の影響で、工場は大手企業へ売却されることになる。

「このまま雇われるか、自分でやるかを考えて。設計なら一人でもできるな、と思ったんです。」

2012年、三浦さんは個人事業として独立。金型そのものではなく、金型設計に特化した仕事を選んだ。



ほとんどの人が見たことのない仕事

三浦さんが手がけるのは、自動車部品を量産するためのプレス金型の設計だ。

鉄板をどう切り、どう曲げ、どう成形するかを、図面の中で組み立てていく。

「僕の仕事、見たことがある人はほとんどいないと思います。」
部品の多くは車の内側や裏側にあり、完成した車を見ても、自分の仕事が目に入ることはほとんどない。

コンマ0・1ミリと向き合う日々

金型設計の世界は、コンマ0・1ミリの差

が結果を左右する。

「一つ間違えたら、徹夜です。材料を増やせばコストが上がるし、減らせば型が作れない。」若い人に理由を聞かれても、「経験上そうなる。」としか言えない場面も多い。

積み重ねてきた時間そのものが、判断力につながる仕事だ。

変化の時代、それでも前を向く

電気自動車の普及などで、自動車業界は大きな転換期を迎えている。

「今は、正直きついですね。」それでも三浦さんは淡々としてい

から最悪バイトすればいい。会社を抱えてるところよりは気楽かもしれないません」

今後は3D設計への挑戦や、自分のオリジナル商品をつくることも考えている。

「部品じゃなくて、一つの製品として完結するもの。一回、発明してみたいですね。」

高梁という、帰ってくる場所

「自然が近いのがいいですね。山も海も行きやすい場所にあるし、釣りやゴルフもできる。」都会に長くいると、結局ここに帰りたいという。

「ここは、故郷なんですよ。」

完成した車の中で、三浦さんの仕事が目に入ることはほとんどない。

それでも、高梁の一角で描かれた一枚の図面は、今日もどこかで車の一部となり、静かに社会を支えている。



自宅で設計をする三浦さん

“まずは自分を整える”という仕事観

木下 正伸さん



——海外経験と震災支援が育てた、市役所職員・木下さんの生き方

高梁とつながっていた原点

高梁市役所・協働定住課で働く木下さん。

交通安全や公共交通、町内会支援など、市民の暮らしを足元から支える仕事を担っている。

出身は真庭市だが、祖父母が住む成羽町を幼い頃から訪れ、「いつか住んでみたい。」と感じていた。平成23年に市役所へ入庁後、観光、国際交流、市民協働など多様な部署を経験してきた。

福島で出会った、生きる姿勢

価値観を大きく変えたのが、東日本大震災後の福島県浪江町での支援経験だ。

厳しい状況でも「ここで生きる」と前を向く人々の姿に触れ、「チャンスがあれば手を挙げて挑戦したい」と思うようになった。この経験が、後の海外挑戦へとつながっている。

家族とともに選んだ、パリでの挑戦

数年後、フランス派遣職員の募集を目にした木下さん。3人目の子どもが生まれる直前だったが、妻の「やっ



パリの世界旅行博で岡山県のPR

てみたら？」という言葉に背中を押され、家族5人でパリへ渡った。
 言葉の壁は大きかったが、「完璧でなくても、まず話す」姿勢を学び、この経験は帰国後の国際交流業務にも活かしている。

“自分を整える”が市民サービスにつながる
 大切になっている言葉は、山田方谷の「治国平天下」。
 自分を整え、家庭を大切に、職場を良くする。その積み重ねが、市民のための仕事につながるかと考えている。現在は生成AIも活用し、業務の効率化と質の向上に取り組む。
高梁で描く、これから
 地域に溶け込むきっかけは、意外にもオヤジバンドだった。音楽を通じて人とつながり、「現場に行くこと」の大切さを実感している。



マルセイユ秋祭りで日本のPR

今後は「石」をテーマに、高梁全域を物語としてつなぐ構想も温めている。
若い世代へ
 「最初から限界を決めないでほしい。世界を知り、自分の人生をまっすぐ生きてほしい。」
 福島で、パリで、そして高梁で。多様な経験を重ねてきた木下さんの言葉には、大きな説得力があった。

先進事例調査で訪問したアンティープ・ジュアン＝レ＝パン市にて左から、木下さん、アンティープ市職員のアントニーさん、通訳の大関さん



待たせない窓口、支え続ける日常

岡村 元美さん



3人で回す、松原地域 市民センター

松原地域市民センターの仕事は、大きく三つに分かれています。市役所の窓口業務、公民館の運営、そしてまちづくり。しかし、ここではそれぞれを明確に線引きすることはない。職員は3人。誰か一人の仕事ではなく、その時々で声を掛け合い、助け合いながら日々の業務を回している。

窓口立つという役割

岡村さんが主に担当しているのは、市役所の窓口業務だ。

申請書の受付や手続きの案内、町民からのさまざまな相談対応。市民センターを訪れる人が、最初に顔を合わせる存在でもある。

「お願いされたことは、できるだけ早く終わらせるようにしています。待たせないことが、一番大事だと思っています。」

窓口に来る人は、何かしらの用事や困りごとを抱えている。「頼んだからには、早く返事がほしい。」

その気持ちを想像しながら、岡村さんは日々の業務に向き合っている。

「待たせない」ための
準備

円滑な対応をするために、日々の勉強や予習は欠かさない。分からないまま対応することとはせず、できるだけその場で答えられるようにする。それが、窓口立つ者としての責任だと考えている。

「来られる方は、みんな待っておられるんです。だから、こちらが止まってしまうと、その分だけ不安にさせよう。」
その言葉からは、相手の立場に立つ姿勢が自然とにじみ出ている。

うれしい瞬間は、何気
ない一言

仕事のやりがいを尋ねると、岡村さんは少し照れたように『「ありがとう」と言っていただけのことです。』と笑った。

市民センターで出すコーヒーやお茶を「おいしい」と言ってもらえると、次の日にお茶菓子を持ってきてくれる人もいる。業務としてのやりとりだけでなく、人と人との関係がそこにあることを感じる瞬間だ。

変わっていく町の姿

一方で、町の高齢化

は確実に進んでいる。町民も年齢を重ね、これまで当たり前でできていた行事や活動が、少しずつ難しくなってきた。

それでも、業務そのものがつらいと感じることはあまりないという。できなくなったことを嘆くより、今できる形を考える。そんな姿勢で、日々の仕事に向き合っている。



にこにこ新年会の様子

これからも続いていく
日常

今後やってみたいことを聞くと、岡村さんは「今のままで。」と答えた。

「今の暮らしを、このまま続けていけたらいいですね。」

子どもたちが元気に育ち、町の日常が穏やかに続いていくこと。それが何よりの願いだ。

人がやさしく、ぶどうがおいしい松原。

その日常を、窓口という一番身近な場所から、静かに、確実に支えている。



雑談をアンテナに、町民本位で地域を見る

藤井 輝彦さん



教室から、地域の現場

へ
地域の現場でも自然と生かされている。

初めて尽くしの一年

高梁市松原町出身の藤井さんは、長年、学校教員として子どもたちと向き合ってきた。教室という限られた空間の中で、一人ひとりの成長を支える日々。そんな仕事に区切りが見えた退職の年、公民館運営委員から声をかけられた。

「一つひとつの行事が無事に終わって、『よかった』と言ってもらえるのがうれしいですね。」

「地域の仕事を手伝ってみないか、と言われるんです。」

派手な成果よりも、

「事故なく終わる」

その一言がきっかけとなり、松原地域市民センターで働くことになった。教員時代に培った“人を見る目”や

「誰かが困らずに済む」ことを大切にす。その積み重ねが、地域の日常を支えている。

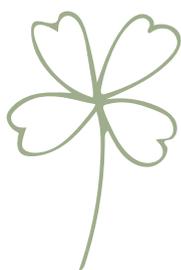
“話を聞く姿勢”は、

雑談は、地域を見るアンテナ

藤井さんが特に大切にしているのが、町民との雑談だ。立ち話や何気ない世間話の中に、地域の本音が隠れているという。

「正式な要望じゃなくても、ポロッと出た一言にヒントがあるんです。」

不便さや願いを聞き逃さず、頭の片隅に置いておく。雑談は、地域を理解するための大切なアンテナだ。



文化祭に込められた想い

毎年の文化祭では91歳の町民が育てた菊が会場を彩る。

「その方にとっての生きがいなんです。」

長年大切に育ててきた花が並び、声をかけられる。その瞬間、個人の人生が地域の誇りとして共有される。藤井さんは、そんな場面に立ち会えることにやりがいを感じている。

変えていく勇氣

地域の高齢化が進み、「去年と同じ形」で行事続けることが難しくなってきた。「無理をして続けるよ



り、身の丈に合った形に変えることも必要だと思っています。」

規模を小さくする、役割を減らす。それは後退ではなく、続けるための前向きな選択だ。

「町民本位」と「無の尽力」

藤井さんの仕事の軸にあるのは「町民本位」。職員の都合ではなく、町民が主役であることを忘れない。

生き方の言葉は「無の尽力」。

結果を求めすぎず、とにかく力を尽くす。

名前が残らなくても、誰かが安心し、地域の日常が続いていくならそれでいい。

雑談に耳を傾けながら、今日も藤井さんは、町民本位で地域を見つめ続けている。



→ ここにこ新年会での様子



「ちょっと聞いてもいい？」が集まる場所

藤井 敬子さん



**松原に戻って、地域と
出会い直す**

藤井さんは浅口市寄島町の出身。結婚後は転勤族として各地で暮らし、子どもが中学生になるタイミングで夫の地元である松原町へ戻ってきた。当初は顔見知りも少なく、人のつながりは思ったより少なかったという。

そんなとき目にしたのが、松原地域市民センターの事務員募集だった。

「人を知るきっかけになればいいな、という軽い気持ちでした。」しかし働き始めてから、出会いは大きく広がっていった。

「ここで働くようになって、本当にたくさんの人を知ることができました。」

窓口に立つということ

藤井さんの仕事は、窓口対応や事務、公民館活動のサポートなど多岐にわたる。手続きの案内だけでなく、行事準備や日常のちょっとした相談にも応じている。「堅苦しい場所じゃなくて、気軽に入ってきてもらえたらいいなと思っています」書類のことで困っている人、どこに聞けばいいかわからず来る人、行政とは直接関係のない相談が持ち込ま

れることも少なくな
い。

白菜が届く関係性

仕事のやりがいを探
ねると、藤井さんは照
れたように笑う。

「白菜が届くことで
ね。市民センターに持
って行ってやろう、つ
て思ってもらえるのが
うれしいです。」

野菜を手に入らりと
立ち寄る町民。電気料
金の通知の見方や、届
いた手紙の意味など、
“どこに聞いていいか
わからないこと”がま
ず集まる場所。それが
この市民センターだ。
「駆け込み寺みたい

感じかもしれない
ね。世間話だけでも来
てもらえるのがうれし
いです。」

**不安があるから、準備
をする**

行事やイベントの前
には、今でも緊張する
という。

「毎回ドキドキしま
す。」

それでも、準備を重
ねることで不安を一つ
ずつ減らしてきた。目
立つ役割ではなく、
も、資料をそろえ、段
取りを確認し、当日を
迎える。その積み重ね
が、地域の行事を支え
ている。



新しい挑戦は、ピアノ

最近始めたのが、ピ
アノ。公民館講座に通
い、まったくの初心者
からのスタート。

「脳トレになればい
いかな、と思って。」

という軽い気持ちだっ
たが、今では楽譜を追
いながら、指を動かす
時間が楽しみになっ
ている。

**みんなの笑顔が見える
場所に**

藤井さんが大切にし
ているのは、特別な目
標や難しい言葉ではな
い。

「みんなが仲良くでき
て、笑顔が見られたら
いい。」



ここにこそ新年会の様子

その思いが、窓口の
やわらかな雰囲気をつ
くり、「ちよつと聞い
てもいい？」と声をか
けやすい空間につなが
っている。

今日も市民センター
には、用事がある人
も、特に用事のない人
も訪れる。藤井さんの
やさしい窓口は、松原
の日常を静かに支え続
けている。

「夜明け前が一番暗い」－挑戦は続く－

島 一郎さん



高梁で生まれ、高梁で生きる

島さんは高梁市出身。生まれ育った町を離れ、大学進学を機に上京した。その後、家を継ぐ前の修行として岡山県内の自動車関連会社に勤め、再び高梁へ戻ってきた。

「東京、岡山、高梁。逆ホップ・ステップ・ジャンプですね。」と笑う。

現在は、祖父の代から続く自動車関連会社の三代目。販売整備・修理・板金塗装・保険の四本柱を軸に、地域に根ざした事業を展開している。

音楽に賭けた大学時代

大学時代、島さんは就職活動をしていなかった。

「バンドをやっている、プロになれるかもしれないと思っていました。」長髪にブーツ姿で音楽に没頭し、レコード会社から声がかかったこともあったという。結果的に音楽一本の道は選ばなかったが、その経験はいまも人生の大切な一部として息づいている。

現場から社長へ

高梁に戻ってすぐ社長になったわけではない。現場の一員として働き、専務を経て、平

成21年に社長へ就任。
現在は16年目になる。

父は会長として会社
を支え、世代交代を進
めながら経営を続けて
きた。

「お客さんに喜んで
らえたときが一番うれ
しいですね。」

その一方で、人を相
手にする仕事の難しさ
や、期待に応えられな
かった悔しさは、今も
心に残っているとい
う。

「夜明け前が一番暗
い」

島さんが大切にしてい
る言葉が「夜明け前
が一番暗い」だ。



青年団活動や地域活
動、青経協・YG（ヤ
ング・ジエネレーショ
ン）の会長などを経験
する中で、簡単に進ま
ないことほど意味があ
ると実感してきた。

「最後の最後で壁が
出てくる。でも、それ
を越えた先に、いい結
果があることが多い。」

この考え方は、仕事
にも地域活動にも通じ
ている。

商工会議所会頭として

令和に入り、高梁商
工会議所の会頭に就
任。経営支援だけでな
く、地域全体をどう支
えていくかを考える立
場になった。

「高梁は消滅可能性都
市とも言われていま
す。特効薬はないけれ
ど、何もしないわけに
はいかない。」

行政や学校、若い世
代とも連携しながら、
できることを一つずつ
模索している。

もう一つの軸、音楽

現在もバンド活動は
続けている。岡山や倉
敷でライブを行い、高
梁のイベントやヒーロ
ーのテーマソングを手
がけたこともある。

「地元だとちよっと恥
ずかしいんですけど
ね。」と笑う姿から、
肩の力を抜いて挑戦を
楽しむ人柄が伝わっ
てくる。

高梁の未来へ

「高梁の好きなどこ
ろは？」と聞くと、
「ずっと高梁だから分
からない。」と言いな
がらも、歴史ある町で
暮らし続けられる価値
を年々感じているとい
う。

若い感性を取り入れ
ながら、町を次へつな
ぐ。島さんは今日も、
高梁の中核として、夜
明けを信じ歩み続け
ている。



工作中的島さん

「すぐやる。できるまでやる。勉強する。」

小田 幸伸さん



**教育と地域に人生を重
ねてきた人**

高梁市備中町西山で生まれ育った小田さん。地域の学校で学び、高校卒業後は福岡の大学へ進学し、教員の道を選んだ。

新見市や成羽町の小学校で教壇に立った後、教育委員会へ。学校現場、社会教育、行政と、立場を変えながら一貫して教育に関わり続けてきた。

**社会教育と学校教育、
二つの現場**

備中町での社会教育、高梁教育事務所、岡山県教育委員会では教職員人事や制度改革を担当した。

「一番つらかったのは処分の仕事。」教育を守るために必要だと分かっていても、決して慣れることはなかったという。

**「勉強しない頑張り」
は意味がない**

県での仕事を通じて、小田さんの中に定まった言葉がある。

「すぐやる。できるまでやる。勉強する。」
気持ちだけでは教育は動かない。法律や制度、データを押さえ、根拠を持って動く。

その姿勢は、その後の教育行政の軸となった。



統廃合という、最も重い決断

高梁市教育長として最も苦しかったのは、学校の統廃合だった。自身の出身校も姿を消す中、「やらないことで次の世代に負担を残したくなかった。」と語る。

説明を重ね、基準を明確にし、地域と向き合いながら決断を引き受けてきた。

子どもたちの未来を思つて

少子化と情報化が進む時代。「子どもが少ないことが、不利にならない教育環境をつくらなければならない。」

ICTが進む社会の中でも、子どもたちには「たくましく、しなやかに」生きてほしいと願っている。

肩書きを外して、いま

退職後は家庭人としての時間を大切にしながら、学び直しにも挑戦している。社会教育主事の講習を再び受け、地域での学びやつながりを支え続けたいという。

「シャルムの活動も、私にとっては社会教育なんです。」



→ 神原スポーツ公園多目的グラウンド改修整備工事完成記念イベント

これからも、地域とともに

部活動の地域展開や地域クラブづくりなど、関心は尽きない。

「高梁は、頑張れば変わる場所。」

教育と地域に人生を重ねてきた小田さんは、肩書きを外した今も、学び、考え、動き続けている。



→ 第30回平松政次旗学童軟式野球大会の始球式の様子

高梁市人図鑑令和7年度版

発行・取材 | 青山美里 (シャルム地域おこし協力隊)

令和8年2月発行

地域おこし協力隊



OKAYAMA TAKAHASHI
Charme
KIBI INTERNATIONAL UNIVERSITY



青山美里 (あおやまみさと) プロフィール

令和6年4月から、岡山県高梁市でシャルム地域おこし協力隊として活動しています。
女子サッカーチームの吉備国際大学Charme岡山高梁 (なでしこリーグ2部) で活躍中！
高梁市の魅力の一つである「人」
そんな魅力ある高梁の人をご紹介します。

「note」にも公開しています。note・Instagramをフォローして、ぜひ読んでください♪



note
Instagram